

4) 陸域生態系（小型コウモリ類）

環境監視の概要は以下に示すとおりである。

項目	生息状況及び利用状況
調査地点・範囲	B, C, E 洞窟、人工洞
調査時期等	B, C, E 洞窟は、洞窟の保全対策実施後から飛行場の施設の供用後 3～5 年程度。 人工洞は、設置後から飛行場の施設の供用後 3～5 年程度。 調査時期は、年 2 回（出産・哺育期である 5 月～6 月、冬季の休眠時期である 1 月～3 月）。 なお、B, C, E 洞窟については、洞窟の保全対策実施後に小型コウモリ類の生息が確認された場合、建設機械の稼働及び航空機の離発着に伴う騒音・振動レベルや洞内環境（温度、湿度）の測定を合わせて行う。
調査方法	昼間あるいは夜間に洞窟内で懸下している小型コウモリ類に赤色光スポットライトを照射し、目視により種ごとの個体数を調査する（目視法）。あるいはビデオ撮影が可能な場所で洞窟の出入り口でビデオ装置を使用し出洞個体数を調査する（ビデオ撮影法）。 出産・哺育や冬期の休眠などの生息状況及び利用状況を観察する。

環境監視の結果により環境影響の程度が著しい変化が認められる場合は、専門家の指導・助言を得て、適切な措置を講じることとする。

5) 海域生物・海域生態系

環境監視の概要は以下に示すとおりである。

項目	海域生物の生息状況とその種組成 海域生物の生息環境である SS、COD、栄養塩物質類、赤土等の堆積量（SPSS）等
調査地点・範囲	轟川河口付近を中心とした海域。 対照点としてトゥールグチ付近や白保にも調査地点を設置。
調査時期等	工事の実施及び飛行場の施設の供用後 3～5 年程度。 調査時期は、海域生物の生息状況とその種組成、または、生息環境への影響が的確に把握できる時期とし、海域生物の生息状況とその種組成は年 1 回、生息環境は年 4 回（調査時期は基本的に変動が大きい赤土等の堆積量（SPSS）の季節変化が的確に把握できるよう、赤土等の堆積が最も多くなる梅雨後の 6 月、台風接近による波浪で堆積した赤土等が外洋へ移動する台風後の 9 月、冬場の季節風により海底の浄化が進むため季節風前の 11 月及び赤土等の堆積が少なくなる梅雨前の 4 月）。
調査方法	現況調査と同じ方法による。

今後、重要な生物が新たに確認された場合は、専門家の指導、助言を得た上で、必要な調査を実施し、事後調査委員会（仮称）に諮り、適切な措置を講じることとする。